

開放型風水景観の特徴把握
—韓国農村集落における風水景観に関する研究 その3—

正会員 ○野口 浩平*¹ 同 佐藤 誠治*²
同 姫野 由香*³ 同 山口 泰佑*¹

風水 景観 農村集落
韓国 集落調査 線画

1. 研究の背景・目的

風水は、地形と人間の営みを結びつける極めて環境重視の作法である。風水によってつくられた景観で、自然と共生することによる安息感を与える効果がある。仮説として、一方急激な工業化が進んだ現代の都市では、地形と人間、または自然と人間の関係が希薄となっている。それは景観にも現れ、都市の景観は地形や自然を無視した粗悪なものが多いのが現状である。

そのため、自然・人間の調和ある環境形成を目的とした風水を現代において追求することは意義があると考えられる。

村山智順¹⁾は、風水の構成は山・水・方位の三者によって成立するとしている。そこでは理想的な風水の地形が挙げられている。また、渋谷鎮明²⁾は、韓国の農村集落を地形ごとに7つに分類^{注1)}している。

本研究では、この両者の研究を基に風水景観を「開放型」、「閉鎖型」の2つに分類^{注2)}した。本稿では、開放型風水景観の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

本研究は、韓国の慶尚南道から全羅南道にかけての 88 オリンピック高速国道沿いを対象地域とし、Google Earth、

Daum による航空写真を用いて、風水地形 7 類型²⁾と一致する 13 集落を設定した。これらの集落において、2010 年 8 月 1 日から 4 日にかけて調査を実施した。調査事項は表 1 に示すとおりである。

本稿では、地形的特徴を集落調査集計表(表 1)から、景観的特徴を写真の線画化によって明らかにする。

3. 集落調査からみる開放型の特徴

表 1 に集落調査集計表を示す。調査を実施した 13 集落中、開放型は 7 集落であった。

集落内の四神方向の要素をみていくと、玄武(北)は 7 集落中 6 集落が「山」、1 集落が「田」であった。これは風水では集落の背後に鎮山もしくは主山¹⁾と呼ばれる山を配置するためである。青龍(東)は 7 集落中 5 集落が「田・畑」、1 集落が「川」、「山」であった。白虎(西)は 7 集落中 5 集落が「田・畑」、1 集落が「川」、「山」であった。開放型の集落では両端が田・畑で構成されることが多く、これが開放型の特徴といえる。朱雀(南)は 7 集落中 4 集落が「川」、2 集落が「道」、1 集落が「田」であった。集落の前方に川を配置することが多い。これは風水の得水法¹⁾と一致する。得水法とは、水を得て山と水が調和した環境を選定する方法である。開放

表 1 集落調査集計表(開放型)

No.	集落名	既往研究 による 類型	全体構成								要素分布								
			四神方向の要素								地形	墓	亭	巨樹老木	祠堂	系の家	書院	集会所	教会
			集落内				集落外												
			玄武	青龍	白虎	朱雀	玄武	青龍	白虎	朱雀									
1	龍山(ヨンサン)	合流点	山	川	田	川	山	山	山	畑	低地 (平地)	離れた主 山	川辺	川辺・集落 内	背後	背後	×	集落内	×
2	松邊(ソンビョン)	背山	田	田	田	田	山	山	山	道	低地 (微高地)	主山中腹	片端	片端	×	×	×	集落内	×
3	東邊(ドンビョン)	背山臨水	山	畑	川	川	山	山	山	山	低地 (平地)	分散	川辺	川辺	×	背後	×	集落内	集落内
4	武陵(ムルン)	背山臨水	山	畑	畑	川	山	山	山	山	低地 (微高地)	離れた主 山	川辺	川辺・集落 内	集落内	背後	集落内	片端	集落内
5	茂村(ムチョン)	背山臨水	山	畑	山	川	山	山	山	畑	低地 (平地)	主山中腹	片端	片端	×	×	×	片端	×
6	院坪(ソビョン)	背山臨水	山	山	田	道	山	山	山	田	低地 (平地)	離れた主 山	片端・入口	片端・入口	×	背後	×	集落内	×
7	道川(ドチョン)	尾根	山	田	田	道	山	山	山	山	低地 (平地)	離れた主 山	片端	片端	集落内	集落内	×	集落内	×

型の集落は得水法を用いて構成された集落であると言える。また、玄武は「山」、青龍と白虎は「田・畑」、朱雀は「川」というパターンが開放型の特徴である。

各集落を地形ごとに「ふもと」、「低地」、「谷あい」の3種類に分類した³⁾。その結果7集落全ての集落で「低地」に類型できた。開放型の立地的特性としては「低地」が多いことが分かる。

4. 線画からみる開放型の特徴

線画から、景観的特徴を明らかにする。線画化することによって、情報量の多い写真を単純化できる。また、要素名や、一定の要素を浮き上がらせて把握することができる。開放型の集落から3つを選定し、開放型および各集落の特徴を述べる。いずれの集落も、朱雀（南）方向から玄武（北）方向をみた写真とする。これは前項で明らかにした開放型風水景観の特徴である、主山と集落、前方に分布する要素の位置関係を把握するためである。

図1は龍山（ヨンサン）の線画である。集落の後方に主山となる山が高くそびえている。その下に集落が低地（平地）に配置され、集落の前方には川が流れている。川によって集落の前方が広く開けていることが分かる。これが開放型の大きな特徴である。また、龍山（ヨンサン）は川が合流する地点に集落が配置されているため、2本の川の間集落が納まった調和関係が確認できる。

図2は松邊（ソンビョン）の線画である。この集落の主山は低く平たい。その下に集落が横に伸びるように配置されている。集落の前方は田畑が広がり、大きく開けていることが分かる。広大な田畑と集落、主山が低くまとまって構成されているのが特徴的である。また、亭と巨樹老木は端部に位置し、集落との存在を別にしていく。

図3は武陵（ムルン）の線画である。主山となる山は小さく、白虎の山が主山の後ろに覆うようにして位置している。主山のダイナミックさは確認できないが、集落の前方には巨大な川が流れているのが分かる。これによって、集落の前方が大きく開けている。集落が写りこむほどに巨大な川が特徴的である。

5. 総括

本稿では、開放型風水景観をもつ集落の特徴を集落調査の結果と線画から明らかにした。

風水によって構成された景観は、自然と集落が共生している様子が極めて詳細に写りこんでいる。今後はその景観がその集落の住人に対してもたらす効果について、仮説で掲げた風水景観の価値や効果を明らかにしたい。

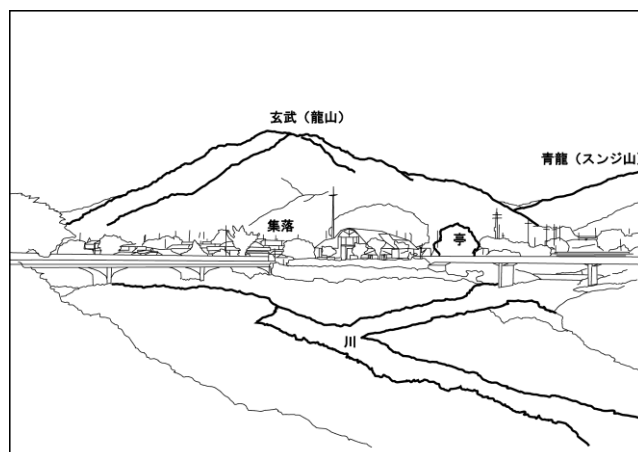


図1 龍山（ヨンサン）玄武方向

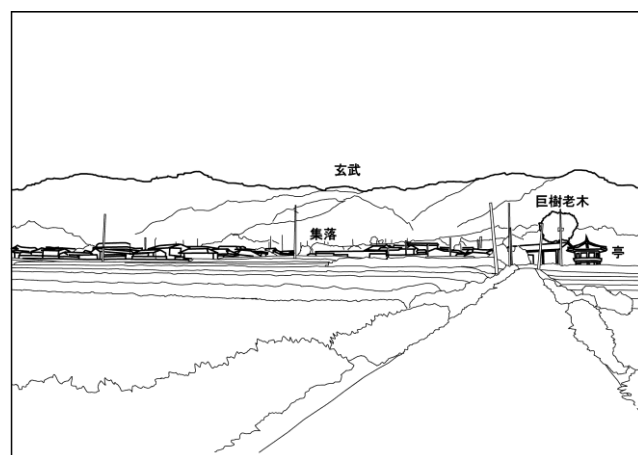


図2 松邊（ソンビョン）玄武方向

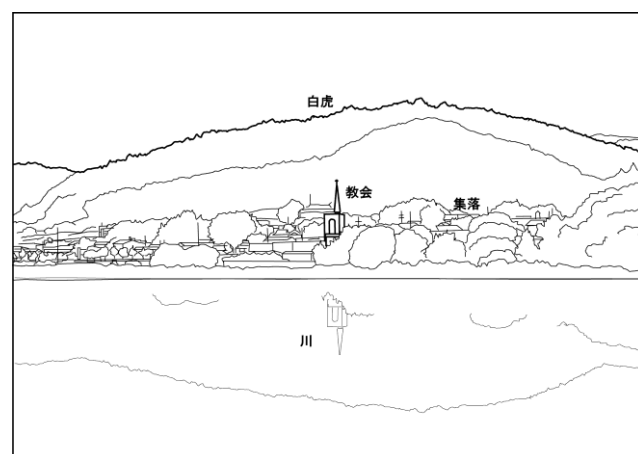


図3 武陵（ムルン）玄武方向

【参考文献】

- 1) 村山智順：「朝鮮の風水」，朝鮮総督府，1931年
- 2) 渡邊欣雄・三浦國雄編：「環中国海の民俗と文化4 風水論集」，凱風社，1994
- 3) 李暎一・重村力：「集落立地と茅亭の位置の特性 韓国・茅亭の研究（その1）」，日本建築学会計画系論文報告集，No.434，pp.89-98，1992.4
- 注1) 山城型，尾根型，合流点型，背山型，背山臨水型，蔵風得水型，谷奥型
- 注2) 地形構造的な分類で，青龍・白虎・朱雀が開けており川との関係がみられるものを開放型，四神方向が山で囲まれており，川との関係が少ないものを閉鎖型と定義した。

*¹ 大分大学大学院工学研究科博士前期課程

*² 大分大学工学部福祉環境工学科・教授 工学博士

*³ 大分大学工学部福祉環境工学科・助教 博士（工学）

*¹ Graduate Student, Oita Univ.

*² Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ. Dr.Eng

*³ Research Associate, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng